

CARE World

Vol. **9** ケア・インターナショナル ジャパン
Newsletter
July 2008



ケア・インターナショナル ジャパンは、世界70カ国で貧困の根源の解決に取り組み国際協力NGO、CAREのメンバーです。CAREの活動は、世界中の33万人のサポーターに支えられています。

Contents

- page **1** パキスタン緊急支援活動 終了報告
- page **3** 企業最前線 ～南アフリカ
- page **4** 事務局からの報告
ケア・インターナショナル ジャパン支援組織講演会／「アジアの祭典 チャリティーバザー」に今年も出展／「アースデイ東京」に初参加！／「アフリカン・フェスタ」にも初参加！
- page **6-7** ベトナム訪問記
～HIV/エイズ 偏見と差別をなくすために
私スタイルのCAREライフ
CARE ボランティアメンバー 門田 りえ
- page **8** CARE ストーリー ～ミャンマー
「ミャンマーのすべての人々にとっての悪夢」
CARE Notice Board

パキスタン緊急支援活動 終了報告

2007年6月に巨大なサイクロンがパキスタン南部を襲いました。

このサイクロンは、大雨・高波・洪水を引き起こし、パキスタン南西部2州と山岳部1州に甚大な被害をもたらしました。災害から1カ月以上経っても、水没したままの被災地さえありました。この災害の発生を受け、ケア・インターナショナル ジャパンは、7月13日～23日の間、スタッフ2名を南部のシンド州に派遣し、災害被害の調査を行いました。住居を失った被災者のうち、他地域に親類縁者のいる人々や経済的に余裕のある人々は既に別の地域に移動していましたが、頼る親類縁者がいなかったり、経済的に余裕のない貧困層の人々は、水の及ばない幹線道路沿いや川の土手などで、防水シートで屋根を作っただけの簡易テントで避難生活を送っていました。その数は、シンド州カンバー・シャダッドコット県内だけで、推定約17万人。政府・国連・NGOなどによる被災地調査では、被災者の多くが家屋と共に衛生環境を維持する上で必須の生活用品、トイレや水場などの施設を失ったことが明らかになりました。安全な水やトイレが十分に確保されない状況の中、被災者の中で下痢や皮膚感染症など劣悪な衛生状態に起因する健康への悪影響が出ていました。

ケア・インターナショナル ジャパンはこのような状況をふまえ、ジャパン・プラットフォームによる事業助成金を得て、スタッフ1名をプロジェクト・マネージャーとして現地に派遣し、最も支援が届いていない地域の一つであったシンド州カンバー・シャダッドコット県ワラ郡で、衛生状態の改善による感染症の予防・治療・流行拡大の阻止を目的とした緊急支援事業を開始しました。



水が引いた後、避難所から村に戻ってきた人々。住居が全戸なくなってしまった村もあり、手に入る木材などで仮の住居を作って生活する被災者もいた

この事業では、「保健医療」「水・衛生」「物資配布」の3つを柱として活動を行いました。

■「保健医療」の活動

避難キャンプにおける劣悪な衛生状況が原因で発生している下痢や皮膚感染症などに対応するため、医師・女性医師助手・医療専門家各1名から構成される診療チーム2チームが避難キャンプなどを巡回しました。支援が届いていない地域や女性と子どもが多い村を優先的に巡回し、基本的な治療を行うとともに、より高度な医療が必要な患者には設備の整った医療施設への照会も行いました。また、下痢などの水因性疾患・コレラ・マラリア・蛇による被害などのケースを監視し、感染症の流行を予防するための措置を講じました。

診療チームは3カ月間に153箇所を巡回、協力NGOや村開発委員会との連携により、モスクの放送を使った事前告知活動が功を奏し、当初の見込みより45%増のおよそ1万7700人が診療にやってきました。この巡回診療を通して、母子保健と衛生環境に対する意識の向上が被災者の間に見られるようになっていきます。



巡回診療にて被災者の診療にあたる医師

■「水・衛生」に関する活動

感染症を予防するために、安全な水と衛生状態を確保することが重要であるため、井戸とトイレの設置を行いました。当初は、避難キャンプに簡易なハンドポンプ式の井戸とトイレを設置する計画でしたが、水没した地域の水が引いた後、避難していた人々が予想以上に早く村に帰還し始めたため、避難キャンプではなく、村に恒久的に使用可能なハンドポンプ井戸とトイレを設置する計画に変更しました。最終的には、93箇所に150式のハンドポンプ井戸と、1～3世帯に1式、合計250式のトイレを設置しました。現在、井戸は約2万人、トイレは約5,400人の人々に利用されています。



村に設置されたハンドポンプ式の井戸(左)とトイレ(右)

■「物資配布」の活動

衛生状態の改善と安全確保を目的として、被災者のニーズに最も適合する12品目の衛生関連品(水浄化剤、水瓶、ふた付きのバケツ、石けん、蚊帳、マットレス、女性用生理用品、サンダルなど)を配布しました。住宅被害が深刻で生活再建がより困難な未亡人や高齢者などの500世帯を対象としました。物資の配布に関しては、計画段階から物資を受け取る被災者の選定・配布に至るまで、各村の村開発委員会の全面的な理解と協力を得て実施しました。

CAREの支援活動では、必ず住民や住民組織に計画段階から参加してもらうようにしています。今回のパキスタン緊急支援事業でも、被災者や住民組織にそれぞれの活動の計画・実施に関わってもらいました。それによって、保健医療活動では効果的な告知を行うことができ、より多くの人々が診療を受けることができました。また、「水・衛生」の活動では、事業開始前には想定していなかった被災者の早期帰還による彼らのニーズの変化にも柔軟に対応することができました。さらに、個々の被災者や住民組織が一体となり、計画・実施することで、住民間の結束・協力体制が強化されました。

また、今回の緊急支援事業では、現地のパートナーNGO (Family Planning Association in Pakistan, Pirbhat Women & Development Society など)、現地行政機関(シンド州保健局、ワラ郡行政府)、国連機関(WHO、ユニセフ)などと連携して、活動を行いました。それぞれの団体のもつ専門性や経験を組み合わせることによって、より効果的な活動を実施することができました。

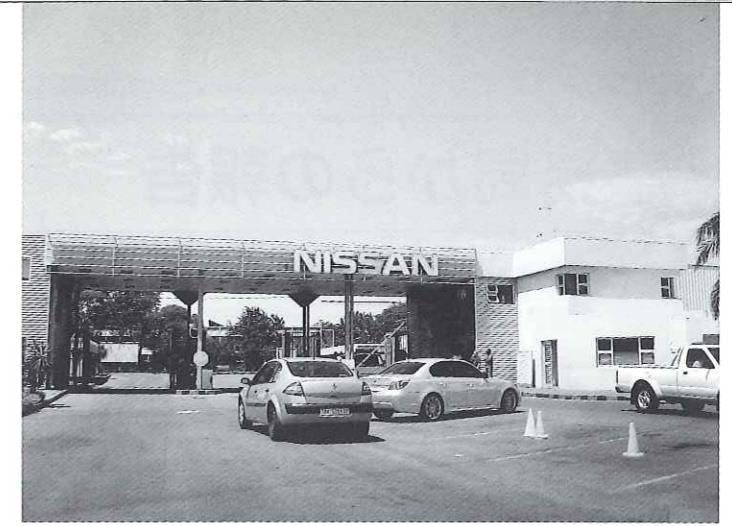
4カ月間にわたって緊急支援事業を行った結果、被災住民の衛生状況を改善することができ、懸念された感染症の流行を未然に防ぐことができました。

*パキスタン・サイクロン緊急支援募金(受付期間:2007年7月~2007年12月)には、個人および企業の支援者の皆様から合計210万5979円が集まりました。皆さまの温かいご支援に心より感謝いたします。

(事業部インターン 齊藤 佳央里)

企業最前線 ~南アフリカ

事業部 武田 勝彦



首都プレトリア近郊の産業地区にある Nissan South Africa (PTY) Ltd の建物

■企業の抱えるリスクとコスト・南アのエイズ問題

喜望峰、ダイヤモンド、アパルトヘイト、ネルソン・マンデラ、ルイボス茶、BRICS、2010年ワールドカップ……。南アフリカ共和国を連想させるものはたくさんある。そして、HIV/エイズもこの国の代名詞となりつつある。500万人以上の人々が感染しており、世界で最もエイズ感染者が多い国となっている。急速な経済発展を続けるこの国にとって、HIV/エイズは労働力を奪う結果となっている。労働者がどんどん亡くなっているのである。外国企業の進出が増えているが、労働者のHIV/エイズ問題は企業にとってリスクとコストとなっている。

Standard Chartered Bank、Mercedes-Benz South Africa (Pty) Ltd.、BMW (SA) (Pty) Ltd. などの欧米企業は、自社の労働者と顧客を守るために、積極的にエイズ対策を講じている。一方、日系企業の対策はそれほど進んでいない。日系企業の進出を促すJETRO(日本貿易振興機構)は、日本の企業が参入しやすいようにエイズ対策の情報を収集し、提言を行っているが、意識の差は欧米企業と日系企業とでは開きがあるようだ。しかし、南アのエイズ問題こそ、日本政府・日系企業・市民社会という官民パートナーが、互いの強みで互いの弱みを相殺し取り組んでいける場であろう。

■Nissan South Africa の取り組み

今回、首都プレトリア近郊の産業地区にある Nissan South Africa (PTY) Ltd を訪問した。コーポレートアフェアーズ・コミュニケーション部のQolo氏とヘルスマネージャーのDr.Rajooに会い、Dr.Rajooから同社のヘルスケアについての説明を受けた。HIV/エイズ対策は、社員健康プログラムという同社のプログラムで行っており、①エイズ予防、②エイズ治療、③モニタリング・評価、④コミュニティ支援の4つの柱から成る。

具体的な内容としては、啓発キャンペーン、研修、自発的カウンセリング・検査(VCT)などを実施して予防し(①)、VCTを通して認識されたエイズ感染者に薬品を処方して治療を行う(②)。また、VCTへの参加と行動変容をモニタリングし、評価を行うとともに(③)、近隣住民の中からコミュニティ・カウンセラーを育成したり、同社の教訓を取引業者と共有している(④)。予算の関係上、労働者が住むコミュニティでの啓発活動にまでは対策があまり及んでいないようだ。

また、Qolo氏から同社の地域貢献活動の説明を受けた。移動眼科検診機器を搭載できる車両の寄贈、地方自治体が子どもたちに書籍を配布するための車両の提供、孤児院への物資配布などを行っている。

今後は、同社と近隣コミュニティに向けたHIV/エイズ啓発活動について協議する予定である。



事務局からの報告

ケア・インターナショナル ジャパン支援組織講演会

CAREを長年支援してくださっているケア・フレンズは、現在、全国に3組織あります。今年も、恒例の講演会を楽しみにされている多くの方々にご来場いただき、各地で盛大に開催されました。

● ケア・フレンズ岡山 講演会

3月1日に岡山プラザホテルで北大路欣也さんをお迎えして講演会が行われました。初めてお芝居に魅了された少年時代から、木村拓哉さんと共演なされた「華麗なる一族」の撮影談、そして携帯電話の広告で白犬の「お父さん」の声で大活躍されている現在までを、あの威厳のある声で語っていただきました。

● ケア・フレンズ東京 講演会

3月22日にグランドプリンスホテル赤坂で開催されたイベントでの講演者は、曾野綾子さんでした。自らボランティア活動に精力的に取り組んでいらっしゃる曾野さんは、カンボジアなどでの支援活動を通して経験されたさまざまなチャレンジ、そしてボランティアをする側の心構えや責任などについてお話してくださいました。

● ケア・フレンズ札幌 講演会

6月2日に札幌パークホテルで由紀さおりさんと安田祥子さんをお迎えして、童謡とトークを中心としたチャリティ・コンサートが開催されました。日本の唱歌と合わせて昔懐かしい日本のお話をしてくださったほか、歌を通じたボランティア活動について語っていただきました。

講演会でのチケットやバザーの売り上げから、多額のご寄付をいただきました。紙面を借りて心よりお礼申し上げます。

「アジアの祭典 チャリティーバザー」に今年も出展

4月16日、ANAインターコンチネンタルホテル東京にて、毎年恒例のアジア婦人友好会主催「アジアの祭典」が開催されました。アジア各国からの料理や民芸品が販売され、例年通り多くの方が来場されました。CAREは横田評議員をはじめとする多くの方のご協力のもと、出展させていただき、Tシャツやバッグなどを販売しました。特に今年初めて販売した子ども用Tシャツは大好評でした。今年も当日のバザーによる収益をご寄付としていただきました。紙面を借りて、ご協力いただきました皆様に心よりお礼申し上げます。

「アースデイ東京」に初参加！



あいにくの天気でしたが、ブースには環境問題や国際協力に関心のある方が立ち寄ってくれました

4月19日(土)、20日(日)の2日間、代々木公園で開催された「アースデイ東京」にCAREは今年初めて出展しました。「地球のことを考える日」、アースデイ。気候変動など環境問題がクローズアップされることの多い昨今、CAREが取り組む活動とは一見関連が薄いように思われがちですが、環境の変化は貧困問題・食糧問題などCAREが支援する途上国の人々の生活に深刻な影響を与えています。

CAREブースでは、水問題・貧困・飢餓などさまざまなことを見て、触って、考えて世界とつながっている実感を持ってもらいたいと、「プチ体験」を企画しました。ブースを訪れ、プチ体験に参加してくださった方々にとって、何かを考え、始めるきっかけになったことを期待します。両日とも強風に悩まされ、雨に降られるといったあいにくの天気の中、ブースまで足を運んでくださった皆さん、お手伝いいただいた皆さん、ありがとうございました！

「アフリカン・フェスタ」にも初参加！

晴天に恵まれた5月17日(土)、18日(日)の両日、第4回目のアフリカ開発会議(TICAD IV)の開催地である横浜において「アフリカン・フェスタ2008」が開催されました。ケア・インターナショナル ジャパンは、今年の4月からレソトにおいて初のアフリカ事業を開始したことから、初めてこのイベントに参加しました。会場となった赤レンガ倉庫イベント広場には、暑いぐらいの日差しに陽気な音楽、おいしそう各国料理のにおいに誘われて、多くの方が来場しました。

CAREでは、今年2月から3月にかけてレソト現地調査へ行ったインターンが特設会場において活動紹介を行ったほか、彼女が撮影・作成したレソト紹介映像をブースで流し、多くの方にレソト、そしてCAREの活動について知っていただく良い機会となりました。駐日レソト王国大使館の大使もCAREブースまで足を運んでくださり、映像を見て大変喜んでくださいました。レソトは、日本においてあまり知られていない国ですが、興味を持っている方、すでにレソトを知っている方や行ったことのある方まで、多くの方がブースに来てくださいました。

ブースまで足を運んでくださった皆さん、お手伝いいただきました皆さん、ありがとうございました！



バントハットと毛布というレソトコスチュームに身を包むCAREインターン(左)と、ンデベレ族の人形をもとに制作した衣装(?)を着てポーズをとるCAREボランティアスタッフ(右)



CAREブースは、CAREグッズや民芸品に関心を持つ来場者で大盛況！

ベトナム訪問記

～HIV/エイズ 偏見と差別をなくすために

マーケティング部 荒井 康子

■HIV陽性者たちに対する差別と偏見

HIV/エイズに関する知識不足が原因で、HIV陽性者たちはさまざまな場面で偏見や差別に直面する。特に医療施設での治療の拒否や制限は、直接生命に関わる。2004年から2006年にかけて実施された調査結果はとても衝撃的だ。ハノイ市、ホーチミン市、クアン・ニン県の医療従事者の60%がHIV陽性者に触れると感染するのではないかと不安を抱き、11%はHIV陽性者を担当したり、触れたりしないようにしていると答えている。また、政策策定者の90%が、性産業従事者・麻薬摂取者・同性愛者を隔離して精神的に更正させることがHIV感染予防の最良策であると回答している。

このような状況の中、CAREは前述の3地域で、HIV陽性者・医療従事者・政策策定者のそれぞれが、HIV/エイズと陽性者の人権について正しく理解し、HIV陽性者たちが差別をなくすための活動の中心となることで、自信を持って前向きな生活を送ることができるよう、支援している。

■HIV陽性者自助グループの活動

今回のベトナム訪問で、私は5つのHIV陽性者の自助グループのメンバーに会った。その一つのグループの事務所は、首都ハノイから北東に車で4時間ほど、クアン・ニン県ヴァンドン島の簡素な漁師町にある。薬物を摂取した夫からHIVに感染した3人の女性が2004年に立ち上げたこのグループのメンバーは、現在、総勢130人。代表を務める30代の女性、ハンは、夫はその後、薬物を断ち、CAREベトナムのスタッフとして働いていたが、今年3月に亡くなったことを静かに話してくれた。

ヴァンドン島は、船の往来が激しいトンキン湾沿岸の観光地に近く、国境も近いため、薬物の入手が容易である。人々は、生活の厳しさから逃れようと薬物に手を出し、注射針を複数人が共用することでHIVに感染する。グループでは、HIV陽性者やその家族に対するカウンセリング、港湾労働者や女性の性産業従事者などHIV感染リスクの高い人々へのアプローチ、HIV/エイズの基礎知識や人権に関する法律を周知させるための広報キャンペーンなどを実施するほか、エイズを発症して体調が悪化した人々の家を定期的に訪れてサポートする活動も行っている。

ハンによると、今ではメンバーの9割が、エイズウイルスの増殖を抑える抗レトロウイルス薬治療(ART)を受けられるようになったとのこと。メンバーのある男性は、次のように話してくれた。「以前はただ死ぬのを待ただけだった。差別が怖くて、家族にさえ病気のことを話すのをためらっていた。

今はARTのおかげで体調が良くなっただけでなく、生活の質を改善するための知識を得て、地域や行政も私たちの人権について少しずつ理解を示してくれるようになった」。

女性メンバーの一人が、自宅に招いてくれた。港から手漕ぎボートで10分ほど行った場所にある島の脇の海上に、彼女が小さな娘二人と住む家があった。木で作られた質素な一間の家で、部屋の半分が作りつけのベッドになっており、壁には娘の描いた絵や数年前に亡くなった夫の写真が飾られていた。HIV陽性の彼女を雇ってくれる職場がないため、家の周りの木枠と網で囲った海中で魚を育て、それを売って生計を立てている。彼女は、長女は学校での成績が良く、絵や歌も得意なのだと言いつつに教えてくれた。私たちの横でくたくたくと笑う長女は、グループの広報キャンペーンで歌を歌い、母親たちの活動を支えている。



病院でカウンセリングを受ける女性(左)。HIV感染の可能性のある妊婦などが訪れる。院内にはCAREが提供したHIV/エイズに関する資料が配布用に設置されている

■大学生を対象とした広報キャンペーン

ヴァンドン島からハノイに戻った私は、「フェイス(信頼)」という名の別の陽性者自助グループが市内の大学の講堂で行う広報キャンペーンに参加した。最初にハノイ・エイズ予防センターの副所長が、HIV感染を防ぐ10項目の助言をメロディーに乗せて歌い、学生たちの心を一気に引き付けた。さらに画像やグラフなどを使ってHIVや人権に関する基礎的な情報を学生たちの日常生活と関連づけながら説明した。その後、フェイス・グループのメンバーによる歌と踊りが始まり、会場は学生たちの歓声と熱気に包まれる。グループの代表3名が、自らの経験を語る場面もあった。30代前半の男性メンバーは、大学生のときに遊び心から薬物を試して感染したことを話し、絶対に薬物に手を染めないで欲しいと訴えた。そして最後に、今日学んだことに関するクイズ大会まであり、会場はさらに盛り上がった。驚いたのは、2時間のキャンペーンの最初から最後まで、学生たちが興味を持ち続けて参加できるよう運営されていたことと、実際に彼らは薬



海上にある木造の家に住むHIV陽性者

しみながら確実にエイズの知識を身につけていたことである。このキャンペーンは新聞やテレビでも取り上げられ、ハノイだけでなく、さまざまな地域からイベント実施の依頼があるとのことだった。

■偏見・差別へのさらなる挑戦

今回、訪れた5つのHIV陽性者自助グループは、行政・医療関係者・学生・地域の人々など異なる対象に、偏見や差別を取り除くためのアプローチを行っている。どのグループも、以前と比べて状況はとても良くなった、と話している。彼らと出会い、最も強く印象に残ったのは、その明るさと自信に満ちたエネルギーである。しかし一方で、イベントの壇上で堂々とHIVへの理解を訴えるグループ代表者が自分の子どもの学校には病気のことを隠していたり、ARTは受けられるようになったものの医療現場での差別は簡単には変えられないといった声も聞かれるなど、今も多くの課題が残されている。生きていくために収入を得る方法を模索しながら、病気だけでなく偏見や差別とも日々対峙し、それを変えるために自ら行動するという、健康な人間でも体力や精神力を要する取り組みをHIV陽性者たちが行っていることの大変さ。彼らが時折、垣間見せる「疲れ」から、それが強く感じられた。それでも、ハンが言った謙虚な言葉の中に、今後のさらなる大きな変化が見えたような気がした。

「まず、私たちHIV陽性者自身が変わり、自分で自分を差別することをやめることによって、医療関係者や行政の考え方も変えることができる」と信じています」。



陽性者自助グループによる広報キャンペーンの様子。技術系の大学の講堂で行われたこのイベントの参加者は、大半が男子学生。彼らは、エイズの正しい知識を身につけるのにとっても意欲的だ

私スタイルの CAREライフ

CARE ボランティアメンバー
門田 りえ



昨年の「世界難民の日」に関連して国連大学で開催されたイベントにて(一番右が筆者)。スタッフ、ボランティアさんと

～ やってよかった!～

私が国際協力に興味を持ったのは、小学生のころ経験した阪神大震災がきっかけでした。年月が流れると、震災で味わった不便がまるでウソみたいになり、何となく生活が当たり前になっていました。しかし、このあまりの違和感と、それを当たり前のように受け入れている生活に疑問を覚えました。今、手に入れている幸せを「当たり前」に思っただけでいいと感じるようになりました。私は家族に恵まれ、衣食住には困らない生活ができています。しかし、世界中には環境に恵まれず不自由な生活を強いられている人が数多くいる。「自分には関係ない」と済ませるのではなく、どんどん関わっていきたく感じるようになりました。そんな中、出会ったのがCAREでした。

CAREでは、イベントへの参加やメルマガ作成に関わっています。初めてメルマガ会議にお邪魔したとき、会話の中で国際協力に関する単語がバンバン飛び交っていたことに度肝を抜かれたのを覚えています。わからない単語だらけで、自分の知識のなさを反省しました。しかし、これを機会に知識を吸収しようと、メルマガ作成に参加するようになりました。毎回奮闘しながら原稿を書いているのですが、いろんな人から意見をもらい、修正を重ね、完成した原稿を見ると、多くの人に支えられていることを実感し、書き上げた達成感でいっぱいになります。

初めは「何か自分ができることがあれば」とCAREのボランティアに応募したのですが、いざ活動してみると勉強になることばかりで、今では自分のためになっています。NGOってかなり敷居が高いイメージがあったのですが、あの時、勇気を振り絞って応募してみてもよかった!本気でそう思えます。これからも、自分のできる範囲で活動を続け、それが結果として支援につながればよいと考えています。



メルマガメンバーと、事務局にて



お米を布に包んで持ち帰る被災者。ヤンゴンにて

©CARE

CAREストーリー ～ ミャンマー ～

ミャンマーのすべての人々にとっての悪夢

文・写真：CARE緊急支援チーム Yiyi Cho

2008年5月20日

サイクロン発生後、私はまず娘のことを考えた。多くの家が損傷したり、破壊されたりして、CAREのスタッフは衝撃を受けていたが、今は皆、忙しくしている。ショックを受けて立ち尽くしている場合ではないのだ。しかし、やはり自分の国がこのような大被害を受け、被災した人々を見るのはつらい。皆、家族や友人など誰かが被害に遭っているのだ。

2日前、海の近くに位置するある村を訪れた。サイクロンからすでに2週間がたった。村に行く途中、二人の小さな子どもの遺体を目にした。二人とも私の娘と同じくらいの年齢だ。私の娘は9歳である。一人の母親として私は衝撃を受け、目をそらさずにはいられなかった。

彼らの母親はどこにいるのだろうか、もし母親が生きていたら、子どもを亡くした彼女がこれから経験しなければならないであろう苦難はどのようなものだろう、と私は思った。そして、自分だったら何をしたらだろう、娘を救うことができただろうか、と考えた。

村で年老いた女性に会った。70歳とのこと。サイクロンが襲ってきたとき、彼女は洪水から身を守るために木によじのぼって一命をとりとめたそうだ。彼女には中学2年生と小学4年生の二人の孫がいるが、二人とも海の近くの水田で働く両親のところに行っていた。サイクロンによる嵐は、孫とその両親の命を奪った。そして、この女性は家族全員を失い、独り、後に残されてしまった。

CAREは、生存者にろうそく・衣類・毛布などの必需品を含む5人家族用の救援キットを配布している。この女性は救援キットの中身をほかの家族に寄付した。失った娘、義理の息子、そして二人の小さな孫のことを想いながら。

多くの人々が食糧を求めて路上に座っている。彼らの家は破壊されてしまった。これは、ミャンマーのすべての人々にとって悪夢である。人々は助けを求めている。彼らが求めるのは、何はさておきお米である。シェルターと食糧が人々にとって最も重要なものだ。私たちが支援をすると、人々はまた来てほしいと言う。そして、ほかに支援を必要としている人々がまだいる、と話す。

私たちは、明日再びこの村に来て、もっと多くの食糧や救援物資の配布を行う予定である。私はまたこの年老いた女性を探さるだろう。

9歳の娘は、被災者を助けるために私がどんなことをしているのか、たずねる。私はこのように答える。私にできることすべてをやっているのよ、と。

*ケア・インターナショナル ジャパンでは、サイクロン発生直後からサイクロン被災者支援のための緊急募金ご協力の呼びかけを行い、2008年6月15日現在、14,870,972円のご支援が寄せられています。ご支援いただきました皆様に、紙面を借りて心よりお礼申し上げます。

CARE Notice Board

定期支援のお願い

ケア・インターナショナル ジャパンでは、毎月、決まった金額をご支援いただく、「CARE マンスリー・ギビング・プログラム」にご協力いただける方を募集しています。継続的で安定したご寄付は、途上国の人々の自立を助けるという息の長い活動を、より確実に、より効果的に進めることを可能にしてくれます。ぜひご協力をお願いいたします。

CAREマンスリー・ギビング・プログラムとは

1000円単位でご自由にお決めいただいた定額寄付金を、毎月1回、ご指定の金融機関や郵便局の口座から自動的に引き落とすことで、継続的にCAREの活動をご支援いただく制度です。なお、自動引き落としに手数料はかかりません。また、ご連絡いただければ、寄付額の変更やご寄付の停止にもすぐに対応いたしますので、安心してご参加ください。

CAREマンスリー・ギビング・プログラムに参加いただいた方には

世界各地で行われている支援活動についての最新情報やコミュニティの人々の生の声などを紹介するニュースレターを随時お届けするとともに、年1回発行する「年次報告書」で、ケア・インターナショナル ジャパンの活動内容や運営状況について詳しくご報告いたします。

そのほか、個人賛助会員(年会費 1口 10,000円)や個人準賛助会員(年会費 1口 5,000円)も随時募集しています。

「CAREマンスリー・ギビング・プログラム」や会員制度への参加をご希望の方は、以下までご連絡ください。すぐに、関係資料をお送りさせていただきます。多くの皆様のご参加をお待ちしています。

(財)ケア・インターナショナル ジャパン
募金・個人会員担当

TEL: 03-5950-1335 FAX: 03-5950-1375
E-mail: monthly@careintjp.org

ケア・インターナショナル ジャパン
ニュースレター
CARE World Vol.9
2008年7月31日発行(季刊)
発行人: 野口千歳
編集: 菅沼みゆき

財団法人 ケア・インターナショナル ジャパン
〒171-0032
東京都豊島区雑司ヶ谷2-3-2
Tel. 03-5950-1335 Fax. 03-5950-1375
E-mail. info@careintjp.org
www.careintjp.org

CARE World

Vol. **10** ケア・インターナショナル ジャパン
Newsletter
October 2008



ケア・インターナショナル ジャパンは、世界70カ国で貧困の根源の解決に取り組む国際協力NGO、CAREのメンバーです。CAREの活動は、世界中の33万人のサポーターに支えられています。

Contents

- page **1** 企業とCAREのパートナーシップ
- page **4** 事務局からの報告
ケア・サポーターズクラブ大分総会/ミャンマー・サイクロン被災者支援活動 スタッフ帰国報告会を開催/日本テレビ「24時間テレビ」で、CAREのカンボジア事務所が支援する子どもたちの様子が放送されました
- page **5** バングラデシュ・サイクロン緊急支援活動報告
- page **6** スリランカ After-TEA プロジェクトの終了にあたって
- page **7** ミャンマー・サイクロン被災者支援活動の現場から
- page **8** CARE Notice Board

企業とCAREのパートナーシップ

日産自動車の社会貢献活動 人道支援について

日産自動車株式会社
グローバルブランドコミュニケーション部 こもた 菰田雄士

■日産自動車の社会貢献活動について

日産は、利益ある成長を遂げながら、将来にわたって持続可能な企業であることを目指し、企業市民として社会の持続可能性を実現するために、「教育への支援」「環境への配慮」「人道支援」といった分野を中心に、さまざまな社会貢献活動を行っています。活動にあたっては、日産が掲げるビジョン「人々の生活を豊かに」のもと、一企業市民として同じビジョンや目的をグローバルに共有した上で、それぞれの国や地域の実情に配慮し、社会との共生に根ざした活動を展開しています。人道支援の分野においては、主に緊急災害支援で社会に貢献しており、一番

最近の事例では、岩手・宮城内陸地震における義援金の寄付が挙げられます。

■スマトラ島沖大地震での日産の緊急支援

2004年12月26日に発生したスマトラ島沖大地震に対し、翌2005年1月6日、日産は総額1億円の緊急支援とグローバルレベルでの従業員募金活動の実施を決定しました。その後、複数のNGOと対話を繰り返し、スリランカにおいてはケア・インターナショナル ジャパン(以下、CARE)との協働を選択しました。当社がこれまで、「ニッサン童話と絵本のグランプリ」などの活動を通じて次世代育成への貢献を行ってきたことと、「子どもの心のケアプロ



ジェクト」で傷ついた子どもたちのメンタル面でのサポートを計画したCAREの困難な状況にある子どもに寄せる思いが合致し、プロジェクトをスタートさせることになりました。プロジェクトスタートまでに多くの時間を費やしましたが、遅すぎるということはなく、それだけ大きな被害であったとも言うことができるでしょう。

■CAREと パートナーシップを組んで

被災地支援は必ずしも当初描いたような計画で進むものではありません。CAREとのプロジェクトにおいても、子どもたちを取り巻く環境、家庭や学校、コミュニティなど、刻一刻と変化していきましました。被害の大きかった南部のハンバントタ県に、日産の支援は届けられましたが、当初は学校を中心としたプログラムが組まれていました。

しかしながら時間が経ち、次第に問題が各家庭やコミュニティに内在していること、特に貧困層の多いコミュニティに存在していることがCAREおよびボランティアの活動を通じて明らかになってきました。CAREと日産は再び対話し、計画の変更を決定しました。勇気のいる決断ではありませんでしたが、結果としてより受益者のためになる変更であったと考えています。

企業もそうであるように、NGOも運営の透明性やステークホルダーへの説明責任を負う時代となり、経営上求められる質もより高次元になっていると考えられますが、CAREは一NGO団体として、その責任を十分に果たしてくれていると考えています。より一層、企業の関心事や要望にも理解を示していただけるようであれば、そのパートナーシップの可能性はさらに広がるものと考えられます。

現在、私たちの手元には、今回のプロジェクトの概要を総括したビデオが届けられております。これを社員向けテレビに活用することを計画しており、社員からのフィードバックが楽しみです。



演劇クラスで発表する子どもたち。さまざまなレクリエーション活動への参加を通して、子どもたちの表情も明るくなりつつある



歯ブラシを受け取る子ども。「心のケアプロジェクト」では子どもたちが心身ともに健全な生活を送ることができるよう健康促進のための支援として、歯の健康について学ぶ機会を提供した

■今後の活動について

日産は人道支援の分野において、今後も協働パートナーを限定することなく、緊急災害の際の支援活動を中心に組み込んでまいります。スマトラ島沖地震被災地支援で得たもの・学んだことをいかし、各NGOの強みや特徴についてさらに理解を深め、効率的かつ実行力のある活動を選択していきたいと思えます。「人々の生活を豊かに」。この企業ビジョンをあらためて心に留めて今後も活動にあたっていきます。



「心のケアプロジェクト」を行っていくことで、津波直後には閑散としていた教室にも多くの子どもたちが戻ってきた

■スリランカ津波 事業報告ビデオ制作

事務局長 野口 千歳

スマトラ沖で発生した津波が、インドネシア、インド、スリランカなどで約23万人の命を奪ってから3年余りが経った2008年3月末、「子どもの心のケアプロジェクト」の事業報告ビデオ制作のためにスリランカ南部を訪れました。このプロジェクトは日産自動車株式会社からの支援で実施され、また当社にはビデオ制作費もご支援いただきました。

当団体としては初めての事業報告ビデオ制作となりましたが、最大のチャレンジは子どもたちの「心の回復」という目に見えにくい変化をどのように映像で伝えるかという点でした。しかし撮影を進めていく中で、その変化は、演劇などの課外活動に積極的にまた真剣に取り組む姿勢と希望に溢れた表情、そしてインタビューに答える自信に満ちた言葉から明らかだということに気づきました。カメラが回っていないところでも、「CAREは私の人生を変えてくれた」という言葉を何度も聞き、そのたびに勇気づけられました。多くの方にこのビデオをぜひ見ていただき、CAREの緊急支援から復興支援に至るまでの活動、そしてその成果を実感していただきたいと思えます。

また、このビデオ制作にあたり、現在、映画やCMなどで大活躍の国際派女優、木村佳乃さんにナレーションをお願いしました。紙面を借りて、心よりお礼申し上げます。

*DVD(パソコンで再生可)の貸し出しを行います。ご希望の方は、当団体事務局までご連絡ください。



2008年3月末にスリランカ南部のハンバントタにて行われた撮影風景

■日産自動車広報部 「オールスタッフミーティング」 にて事業報告

9月9日に日産自動車株式会社 本社2階の講堂で開催された上記ミーティングに事務局長が参加し、「子どもの心のケアプロジェクト」のビデオ報告をさせていただきます。このミーティングには、グローバルコミュニケーション・CSR本部サイモン スプロール執行役員をはじめ、広報部の方68名が参加されました。参加者からは、「とても良い活動に日産が貢献できてよかった」「感動しました」「お客様とのコミュニケーションでも活用すべき」など多くの好意的なフィードバックをいただきました。今後、このビデオは、国内の日産ギャラリーなどで放映される予定です。紙面を借りて、ご協力に心よりお礼申し上げます。



日産自動車とCAREのパートナーシップ事業

スリランカ

スマトラ沖津波復興支援 子どもの心のケアプロジェクト終了報告

事業部 貝原塚 二葉

2004年12月26日、アジア各国を襲ったスマトラ沖地震とそれに伴う津波から、約4年という月日が経ちました。被災国の一つ、スリランカ南部のハンバントタ県も、津波で甚大な被害を受けた地域でした。4,500人以上が亡くなり、4,000棟以上の家屋が倒壊・破損し、1万7,000人以上が避難生活を強いられました。同県の約14%にあたる約7万人の住民がこの災害で直接的な被害を受けました。

現在は、一見、町も村も平穏を取り戻したかのように見えます。しかし、津波の被害は、インフラや地域経済、産業といった目に見えるものだけではなく、家族やコミュニティ内の信頼関係の低下、社会システムの悪化、女性への暴力の増大、アルコール依存症の増加を引き起こしたと考えられます。この結果、この地域における子どもたちを取り囲む環境は危険な状態に陥っていました。CAREは、ハンバントタ地域において、災害発生直後から支援を開始した数少ない支援組織の一つでした。

ケア・インターナショナル ジャパンは、子どもたちが当然の権利として教育を受け、社会生活における能力と適性を高められるよう、また、保護者や教育関係者の能力向上を通じて子どもが学校・家庭・コミュニティの中で精神的にも肉体的にも健康で安全な生活を送ることができるよう、支援活動を展開してきました。

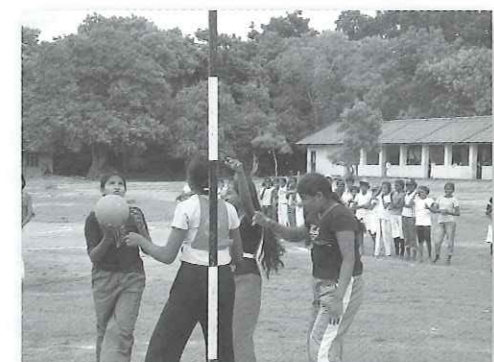
まず、子どもたちの活動の軸となる子どもクラブがハンバントタ県の6つの地域で結成されました。このクラブを通して、子どもたちのリーダーシップ育成のためのトレーニングやこれまであまり機会がなかったスポーツおよび文化・芸術活動が活発に実施されました。また、勉強が遅れている子どもに対する補習や学校教材の提供を行うことで、学校から遠ざかっている子どもたちが再び学校へ通うための支援を

実施するとともに、歯の健康について学ぶ機会を通じて自分の健康や体について考える機会を提供してきました。

さらに、子どもに対する直接的な支援だけではなく、子どもが健康で安全に暮らすための環境づくりも重要な活動目標の一つでした。そこで特に貧しい家庭に対する生計支援や学校の設備支援などを行うと同時に、保護者やコミュニティの住民、学校関係者といった子どもを取り巻く人々のキャパシティ・ビルディングや意識の向上をはかりました。

活動を続けていくなかで、当初は活動参加に消極的だった子どもが徐々に積極的に参加するようになり、子どもクラブのリーダーとして活躍する子どももいました。多くの子どもたちが学校に戻り、就学率も災害直後に比べて上がりました。また、保護者、先生、コミュニティなどの大人たちもより前向きになり、子どもたちの保護を第一に考え、彼らが子どもらしく生きていくためにサポートするようになったことは重要な変化の一つです。一方で、これから取り組んでいかなければならない課題もまだ多く存在しています。

これまでの4年間の変化はハンバントタに住む人々が自ら成し遂げたことであり、今後、課題に向き合い、この変化をより持続的・発展的なものにしていくことができるのも現地の人々です。今後は、現地事務所のCAREスリランカが、別のプロジェクトを通してコミュニティの支援を継続していきます。



事務局からの報告

ケア・サポーターズクラブ大分 総会

8月2日にケア・サポーターズクラブ大分の総会が開催されました。カンボジアのCAREのプロジェクト地を初めて訪れた会員の方が、現地に着くまでの大変な道のり、農村に暮らす人々の生活などについて、見たこと、感じたことをスライド写真を交えて報告されました。また、大分県の広瀬知事のユーモアに溢れた逸話、大分県立芸術文化短期大学の学生さんの演奏、大分県の特産物の販売やバザーなども行われ、活気溢れる会となりました。

ミャンマー・サイクロン被災者支援活動 スタッフ帰国報告会を開催

7月18日にソニー株式会社 御殿山テクノロジーセンターNSビルの会議室にて、「ミャンマー・サイクロン被災者支援活動 スタッフ帰国報告会」を開催しました。被災者支援のための緊急募金にご支援いただきました企業や関東近辺にお住まいの個人寄付者の皆さま、30名にご参加いただきました。

報告会では、6月12日～7月12日までロジスティクス担当として現地で活動してきた事業部スタッフ貝原塚(かいはらづか)二葉が、最新の映像や写真を織り交ぜながら、CAREの現地での活動や被災地の状況、今後の中長期的ニーズなどについて説明しました。参加者からは、「緊急物資の内容」や「軍事政権下での支援活動の難しさ」などについて踏み込んだ質問やご意見が寄せられるなど、関心の高さを伺い知ることができました。また、報告会終了後には、複数の方より「写真や映像を多用していて非常に興味深い内容だった」とのコメントをいただきました。

当日は、発表したスタッフが通信社からの取材を受けるとともに、報告会の様子が撮影されました。なお、詳しい報告内容については、本誌7ページ目の「ミャンマー・サイクロン被災者支援活動の現場から」の記事、もしくは当財団ホームページをご覧ください。

最後に、今回の緊急募金では、200件を超える個人や企業の皆様より、総額 計32,472,873円(2008年7月末現在)にもおよぶご支援をいただきました。紙面を借りて、心よりお礼申し上げます。また当日会場をご提供いただきましたソニー株式会社様にも重ねてお礼申し上げます。

現地での支援活動は着実に進んでいるものの、まだまだ回復には遠い道のりです。これからも引き続きミャンマーにおける支援活動に対してご関心をお寄せいただき、ご支援・ご協力いただけますよう、お願いいたします。

日本テレビ「24時間テレビ」で、CAREのカンボジア事務所が支援する子どもたちの様子が放送されました

8月31日、毎年恒例の「24時間テレビ」(日本テレビ)にて、CAREのカンボジア事務所(CAREカンボジア)が支援するHIV/エイズとともに生きる子どもたちの様子が放送されました。

今回、番組の取材を受けたOur Villagelは、CAREカンボジアが支援する現地パートナー団体、New Hope for Cambodian Children (NHCC) が運営する施設です。この施設では、HIVに感染している子どもたち、家族がHIVに感染していたり家族がエイズで亡くなってしまった子どもたちなどをサポートしています。8月初旬に、今年の24時間テレビのメインパーソナリティを務める人気グループ「嵐」のメンバーである松本潤氏がOur Villageを訪れ、撮影がなされました。

番組の中では、現在、カンボジアにおけるHIVの主な感染経路である母子感染によってHIVに感染した子どもたちが普通の子どものようににはしゃいで遊ぶ様子を写しながらも、毎日決まった時間に薬を飲むことで命をつないでいる様子や母親にエイズを移してしまった父親に対する少女の複雑な思いなどを、映像を通して伝えていました。エイズとともに生きる子どもたちの現実の一端を多くの視聴者の方に知っていただけたのではないかと思います。

放送日当日は、世界のビールを楽しむことができるダイニング・ビア・バーにて特別イベントを開催し、生放送の24時間テレビを皆で見た後、カンボジアとベトナムのエイズプロジェクトのリポートを行いました。特にカンボジアやエイズ問題に関心をお持ちの方が多く来場され、リラックスした雰囲気楽しんでいただけたようです。



バングラデシュ・サイクロン緊急支援活動報告

事業部 武田 勝彦

2007年11月15日、バングラデシュ南西の海岸部をサイクロン「シドル」が襲いました。政府公式発表(2007年12月31日現在)では、死者3,363人、被災者892万3,259人、損傷家屋152万2,077軒の被害状況が報告されています。この災害により、家、道路、通信手段は破壊され、漁業や農業といった生計手段は壊滅的な打撃を受けました。サイクロン前からすでに貧困に苦しんでいた人々の生活状況はより悪化しました。

活動内容

CAREはバングラデシュにおける自然災害対応の豊富な経験から、サイクロン「シドル」の被害に対して最も早く支援活動を開始しました。特に、以下のとりわけ困難な状況にある人々に対して、支援活動を実施しました。

- 災害によって夫と離れ離れになった女性、離婚した女性
- 未亡人が家長となっている家庭
- 女性が家長をしており、他に稼ぎ手のいない家庭
- 子ども、特に孤児が家長をしている家庭
- 妊娠中・授乳中の女性
- 大勢の扶養者を抱える貧困で脆弱な家庭
- 高齢者または障害を抱えている人
- 生計手段を持たない家庭

主な活動内容として、CAREは、被害が大きかった3地区(Bagerhat, Barguna, Pirojpur)において、食糧・安全な飲料水・緊急の避難所(シェルター)・医療サポートなどの提供を行いました。

食糧配布においては、1世帯につきお米、じゃがいも塩、そのほか必要となる食糧を配布しました。また、食糧以外の救援物資として、一時的なシェルターを建てることができるようビニールシートとロープ、さらに石けんやろうそくなどの必需品の配布を行いました。安全な飲料水確保のための活動では、共用の貯水槽の消毒と修繕を行うとともに、1日に1万リットル以上の水をろ過することができる可動式の浄化設備を提供しました。この浄化設備は、1日に最低でも800世帯、約4,000人の人々に安全な飲料水を提供しました。さらにCAREは首都ダッカのコミュニティ病院の医者による医療チームを構成し、被災者の治療に当たりました。



救援物資の配布場所で列を作って並ぶ被災者の人々
© CARE/William Dowell 2007

現地NGOとの連携

被災地には、支援団体などから大量の食糧が届けられましたが、配布が均一でなく、十分な食糧供給を受けている村もあれば、供給を受けられていない村もあるという状態でした。そのような状況の中、CAREの強みはこれまで実施してきたプロジェクトにおける活動でSouth Asia Partnership, Coast Bangladesh and Resouce Integration Centreなど現地NGOと長期的な協力関係を築いてきたことです。現地の市民団体との緊密な関係と現場に持っているネットワークにより、CAREは実際に最も支援を必要としているのは誰なのか、最も効果的な支援物資の配布方法は何なのかということについて、より正確な判断を行うことができました。

サイクロンなどの自然災害に対する対応はスピードが命です。このバングラデシュへの緊急支援では、多くの方々から非常に早い段階でご寄付をいただくことができました。皆様の迅速な対応と温かいご支援に心より感謝いたします。

スリランカ After-TEAプロジェクトの終了にあたって

事業部 尾立 素子

ケア・インターナショナル ジャパンは、スリランカにおいて2003年5月～2006年5月まで実施した「プランテーション居住者の生活改善事業(TEA プロジェクト)」に続く第二期事業として、2006年7月から独立行政法人 国際協力機構(JICA)との連携により「紅茶農園内住民組織の運営能力向上プロジェクト(After-TEAプロジェクト)」を実施しました。ここでは、2008年6月をもって終了したAfter-TEAプロジェクトの成果と今後の課題についてご報告します。

これまでの成果

After-TEAプロジェクトは、紅茶農園内の約150の住民組織に属する農園内居住者4,500人を対象とし、農園居住者に対する公共・社会サービスを継続的に提供することで、農園コミュニティ内の社会保障システムを強化することを目的として実施しました。具体的には次の3点を目指し、これらのすべての面において成果が見られました。

- ① 農園内コミュニティおよび住民組織と農園経営者側双方の連携・コミュニケーションの強化
- ② 住民組織の運営能力の強化
- ③ 農園内外の公共・社会サービスのための連携システムの構築

コミュニティおよび住民組織と農園経営者側双方の連携・コミュニケーション強化については、住民組織と農園経営者の協力を促す目的で、意見交換の機会を提供したことで、関係者間のコミュニケーションや協力体制が改善され、お互いへの理解が深まりました。

住民組織の運営能力にも大きな変化が見られました。住民組織自ら各種研修で学んだ知識を生かし、農園コミュニティ内の道路整備など小規模インフラ事業を計画、実施しました。また、住民が必要とする行政サービスの提供を可能にするため、他団体や行政担当者と調整を行うなど、活動面で大きな役割を果たしました。

公共・社会サービスのための連携システム構築の面では、出生届けなどの行政書類や医療・就職情報の取得、ローンの申込みと

いった、これまで農園内で受けられなかった多くのサービスの利用が可能になりました。また、第一期事業において設置されたインフォメーション・センターは、



農園内に建設されたトイレ。住民組織が自ら計画を立て農園内の生活環境改善に向けて、小規模なインフラ整備を行っている

第二期事業でも会議・情報交換・サービス提供の場として最大限に活用されました。

今後、事業で実施してきたさまざまな活動やインフォメーション・センターで提供されるサービスは、引き続き農園経営者からの協力を得ながら、すべて住民組織の主導によって継続されます。



インフォメーション・センターは、会議・情報交換・サービス提供の場としてさまざまな役割を担っている。写真は、農園内の青少年を対象とした補習の様子

今後の課題

2年間のAfter-TEAプロジェクトの成果を振り返って今後、改善が期待される点がいくつかあります。まずインフォメーション・センターで提供するサービスの多様化です。現在、行政書類や就職情報が得られるなど有益なサービスが提供されていますが、より多様なニーズに応えていく必要があります。例えば、収入向上に役立つ技術訓練の提供、お年寄りや子どもにとっても有益なサービスの提供などが挙げられます。さらに、住民組織が活動を主導していくために、現地NGOなどによる住民組織リーダーへの訓練が継続して行われていくことも必要です。

最後になりましたが、皆様の温かいご支援のおかげで、第一期・第二期事業とも計画通りに活動を進め、成果を出すことができましたことを心より感謝いたします。スリランカの紅茶農園におけるケア・インターナショナル ジャパンの支援は終了しましたが、今後は現地事務所のCAREスリランカが紅茶農園の住民たちと共に生活改善・福祉向上のための活動を続けていきます。

ミャンマー・サイクロン被災者支援活動の現場から

事業部 貝原塚 二葉

2008年5月3日、大型サイクロン「ナルギス」がミャンマーを襲いました。CAREはサイクロン発生直後から緊急支援チームを構成し、食糧や安全な水の供給、衛生用品や家庭用救援セットの配布を行うとともに、48万戸以上が被害にあった被災地で住宅の修復および再建の支援を継続して実施してきました。サイクロン発生から2カ月目に、まだ災害の影響が生々しく残る被災地域に滞在したときの状況についてレポートします。

サイクロン発生から2カ月経過した7月3日、CAREのミャンマー現地事務所の緊急支援チームメンバーと視察のために被災地へと向かいました。これは、サイクロン発生直後から実施している支援活動の状況を確認すると同時に、最新の現場の情報を自分たちの目と耳で把握し、状況の変化に応じた対応をするための視察でした。

被災地に入っていくにつれ、現場の状況がよく見えてきました。2カ月が経過した今も根こそぎ倒された木々や破壊された家屋、ただ残された家の土台などは、サイクロンの威力のすさまじさを物語っているようでした。そして、もう一つ見えてきたのは支援活動を難しくしている要因の一つである、被災地までのアクセスの悪さです。非常に状態の悪い道を何時間も進まなければなりません。また雨が降ればさらに悪化してしまいます。そして、CAREが支援を行っている村には、多くの場合、ボートに乗って1、2時間、さらに小さなボートに乗り換え、数十分揺られてようやくたどり着きます。支援物資の運搬となると、一度に運べる量は限られてしまいます。

このような困難な状況の中、村での人々の様子は至って日常的な生活風景であるように思いました。多くの人が忙しそうに働き、商店や朝のマーケットは非常に活気があり、徐々に被災地域は落ち着きを取り戻しつつあります。よく見ると、村人たちが助け合いながらサイクロンで壊れた家の修復をしたり、壊れた船を修理した

り、あるいは支援物資の運搬作業にボランティアとして参加するなど、彼らなりの復興への参加がその活気を生んでいるのだと気がつきました。今回の現場視察を通して、ミャンマーの人々がお互いに助け合い、生活再建へ向けてそれぞれが努力する姿に、彼らの力強さ、たくましさを感じました。



支援地域の村まではボートで行く。写真は、雨と満ち潮で増水した船着場を歩くスタッフ



サイクロンで破損した船を修復する村人たち。被災地では被害を受けた船が多く見られた。大小の川が張り巡らされた地形のイラワジ・デルタ地区では、船は重要な交通手段

ケア・インターナショナル ジャパンでは、サイクロン発生直後からの緊急支援に続き、復興へ向けた支援の一つとして、農業支援をすでに開始しています。農繁期の始まった被災地において、サイクロンですべてを流された人々がすぐに農作業を開始できるように、トラクターや種もみを配布すると同時に、必要に応じてトラクターの維持・管理の技術的サポートなどを行います。ミャンマーの人々はお米を主食としています。特に被害の大きかったイラワジ・デルタ地域は、ミャンマーでも有数の稲作地帯です。そこで、この地域の人々が生活を再建し、自立することは、ミャンマーの人々が自国米を確保することにもつながり、CAREの支援の中でも重要な活動の一つなのです。

「食糧をもらうことはありがたいけれど、それよりも自分たちの手で作物を育て、収穫したい」と、ある農家の男性が話していました。これは、この地域で被災した多くの人々の気持ちを代弁しているようでもありました。被災地が本当に復興するまでにはまだ多くの時間と努力を要しますが、人々がこのような気持ちを持っていることは、ミャンマーで活動を続けるCAREにとっても大きな希望であると強く感じました。



ようやく届いた支援物資を受け取り、明るい表情で運ぶ被災者の人々

CARE Notice Board

新しい寄付サイトのお知らせ

世界的なスポーツブランドなどの広告を手がけるワイデン+ケネディ トウキョウの全面的協力と、システム会社やデザイン会社など複数の企業によるマルチパートナーシップが実現し、インターネットでの新しい寄付システム「careギフト」が11月10日に誕生します。

「careギフト」は、大切な人にプレゼントを贈るときのお金と気持ちを、寄付という形で地球のどこかで貧困に苦しんでいる人々に届け、代わりに、あなたの大切な人には支援を受ける地域の人々の笑顔の入った E カードまたはポストカードが送られる、というシステムです。「careギフト」サイトを訪れた人は、「care country (ケア・カントリー)」に入国し、支援パッケージをショッピング感覚で購入することによって、寄付をすることができます。また、この体験の中で、貧しい国の人々が置かれている状況について知ることできます。

大切な人のお誕生日、特別な記念日、入学のお祝い、母の日、父の日などにぜひ、「careギフト」をご利用ください。

「careギフト」のURLは

www.caregift.jp

Enriching people's lives

人々の生活を豊かに



日産自動車の社会貢献活動

www.nissan-global.com/JP/CITIZENSHIP

NISSAN

ケア・インターナショナル ジャパン

ニュースレター

CARE World Vol.10

2008年 10月31日発行(季刊)

発行人:野口 千歳

編集:菅沼 みゆき

*このニュースレターのデザイン・レイアウトは、CAREのデザインボランティアさんのご協力により、制作されています。

財団法人 ケア・インターナショナル ジャパン

〒171-0032

東京都豊島区雑司ヶ谷2-3-2

Tel. 03-5950-1335 Fax. 03-5950-1375

E-mail. info@careint.jp

www.careint.jp